

巻頭
座談会

芭蕉翁がむすぶ東海〈前編〉

名古屋大学大学院教授

地域誌『伊賀百筆』編集発行人

大垣市奥の細道むすびの地記念館学芸員

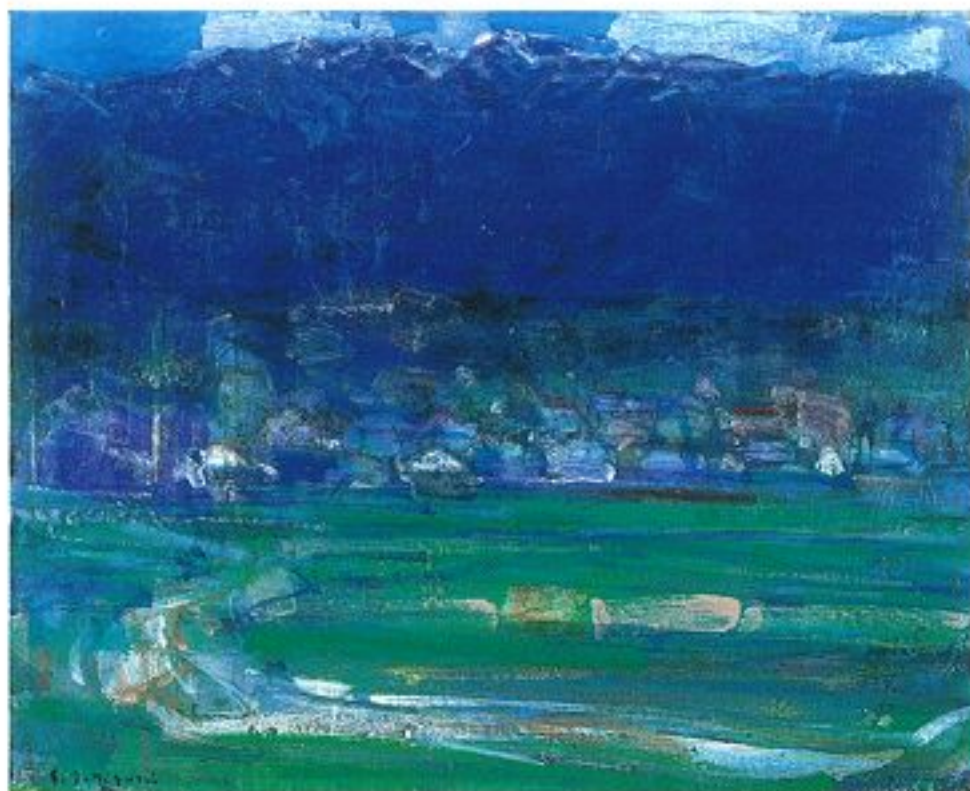
塩村 耕さん

北出楯夫さん

大木祥太郎さん

ネオMAGA人倶楽部

ジャズ・ヴァイオリニスト
寺井尚子さん



『鈴鹿春色』石垣定哉

とうかい

紳士録

TADASHI NAKAMURA

中村 正さん (61)

株式会社秋田屋本店
代表取締役社長



「勤労、友愛、平和。じつに多くのことを教えてくれます」と、信頼と感謝を寄せるビジネスパートナーがいる。それはミツバチ。近代養蜂発祥の地、岐阜で125年続く養蜂問屋の9代目。資材や種蜂を供給し、蜂蜜を買い取ることで養蜂業を支えてきた。

「昔の養蜂家は花を追って南から北へ移動しました。中間点の岐阜で資材を調達し、県の花でもあるレンゲの蜜を採取したんです」

1951年、岐阜市生まれ。関西大学商学部を卒業し、74年入社。98年に社長就任。文化元年(1804)、秋田杉を扱う材木商として創業。新しいもの好きだった6代目が秋田杉で巣箱の製造販売を始め、養蜂問屋に転じた。現在、従業員数260名。年商66億円。

「ミツバチの恵みは数多い。蜂蜜、ローヤルゼリー、プロポリス、花粉、蜜ロウ。針はミツバチとともに125年。近代養蜂の発展支える」

蜂針療法に用いられます」

これらの蜂産品を県内4工場で製品化する。中でも医薬品としてのローヤルゼリーは1963年、日本で最初に製造承認を得た。自社製品生産のほか医薬品メーカーに供給する。

ミツバチの品種改良にも早くから取り組み、2008年に全世界で大量死が起きた際には、健康なミツバチを増やして危機を乗り越えた。

「ポリネーション(花粉交配)もミツバチの大切な働き。新興国の発展が続けば、食料不足が問題になるでしょう。農業生産量を上げるためにミツバチの力は欠かせません」

養蜂振興のためにも「里山を取り戻し、蜜の採れる花を咲かせたい」と休耕田にレンゲを蒔き、蜜源植物を植樹する活動を続ける。

6代目同様、新しいもの好き。ウエイクボードを琵琶湖で楽しむ。絹子夫人との間に一男。